

米サイタイムのヴァシストCEO「ルネサスの事業買収でAI向け拡大」 – Leader's Voice

2026/06/12 05:00 日本経済新聞電子版 1114文字

米半導体設計のサイタイムはルネサスエレクトロニクスから、電子回路を正常に動作させるタイミング部品の事業を買収する。人工知能（AI）向け半導体ブームにどう活用するか、ラジェシュ・ヴァシスト最高経営責任者（CEO）に聞いた。

——なぜ今、ルネサスから30億ドル（約4800億円）での事業買収を決めたのですか。

「我々はタイミング部品に特化した設計企業で、これからAIや自動運転関連を拡大する中で補完的になると考えた。買収する事業はもともと、米インテグレートッド・デバイス・テクノロジー（IDT）の傘下で最高品質を手掛け、19年にルネサスが買収した」

——AI需要を追い風に業績が拡大しています。

「2026年の売上高は25年比で8割増を予想している。ルネサスから買う事業は織り込んでいない。それでもAIブームでこれだけ成長が続く」

「足元の売上高の66%がAIで、残りは約15%がモバイル関連、19%は車載や防衛関連だ。大容量のデータを高速接続するAIサーバーには、低遅延が求められるため、タイミング部品の品質が重要になる。振動や高温といった厳しい環境をシステムレベルで解決できる技術が必要だ。画像処理半導体（GPU）などにも使われている」

——防衛関連や衛星ではどのような需要がありますか。

「米国やインドの軍事力が拡大し、欧州や日韓にも変化の兆しがある。防衛関連では例えば海上ドローンの通信機器や全地球測位システム（GPS）に、精密なタイミング部品が必要になる」

「衛星では低軌道衛星（LEO）1基につき約2000ドル相当のタイミング部品が搭載されており、現在7000～1万基が運用されている。将来的には10万基に達する可能性がある」

——今のAI需要の勢いはいつまで続きますか。

「シリコンバレーには過去、インターネットやスマートフォンなどいくつかの技術ブームがあったが、今回のAIは最も素晴らしいといえる。範囲や規模が広く、設備投資の勢いも10年は続くだろう。それにAIは、インドの農業や米国の教育など、様々な物事を根本から変革する」

——14年に日本の半導体設計会社メガチップスがサイタイムを買収し、近年まで傘下にありました。

「2010年代の売上高の50～60%は日本で、その大半がカメラ向け製品だった。足元では欧米や中国に比べて日本比率は低いが、これから拡大したい」

（聞き手は中藤玲）

Rajesh Vashist インド出身、米マーケット大で経営学修士号（MBA）を取得。複数の半導体企業を経て、1999年に米アイカノス・コミュニケーションズのCEOに就任し、2人体制の創業期から時価総額900億円規模の上場企業へと育てた。2007年から現職

【関連記事】

- ・ルネサス、電子機器のタイミング部品売却を発表 売却先の株一部取得
- ・メガチップス、米社株売却 今期純利益24%増に
- ・メガチップス、米ベンチャー企業を2億ドルで買収



米サイタイムのヴァシストCEO（5月、東京都港区）

許諾番号NK003584 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報(以下「情報」)の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。

本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。

本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。

Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.